

■催淫トレジャーハンター

VRネットワーク内で電腦トレジャーハンターとして暗躍する謎の美女・ゴーストガール。
彼女の生業は企業等から秘密裏に依頼されたデータと引き替えに収入を得ることだ。
今宵もネットの海の中、人知れず取引を行う……

「あら、随分とかわいい代理人ね」

取引相手が代理人としてよこしたのは、まだ若い少年であった。といってもアバターなので実際にどんな人物なのかは分からないが。もしかすればカモフラージュも兼ねているのかもしれない。この見た目なら、仮に見つかったとしても裏の取引をしているとは思われな
いだろう。それほど純粋さを感じる容姿をした少年が、ゴーストガールの指定した口座に大金を振り込み、ゴーストガールもそれを確認
してデータを渡す。

「問題ないかしら」

【いえ、こちらの依頼通りです。ありがとうございます】

「なら よかったわ。じゃ、私はこれで……」

【あ、ところでゴーストガールさん。最近、妙なハッカーが出ているみたいですが……ご存知ですか？】

取引が終わり、すぐ帰ろうとしたゴーストガールを少年が引きとめる。

「妙な、っていうと……催眠術を使うとかいう？」

【はい。噂では、催眠術をかけて相手に絶対服従を誓わせ、意のままに操るのだとか】

「知らないわよ、そんな胡散臭い存在なんて。それを調べるのが次の依頼なの？」

【いえ、そうではないんですが。名立たるハッカーたちが被害に遭っているようなので、一応言っておきたくて】

話を振られ、ある噂に思い当たる。

催眠術を使い、VR空間にログインしている者を次々と隷属させるという謎の存在。それがネット上の一部でまことしやかに囁かれて
いるのだ。

中には狂信的になっている者、それらしい被害を報告する者もいるが……ゴーストガールとしては、そのハッカー、ならびに催眠術と
いう怪しい技術そのものについて懐疑的だ。

真実かどうか分からないのはロマンがあるといえるが、トレジャーハンターとしての勘も好奇心も、その存在には一切反応しない。

呆れるゴーストガールに対し、少年は真剣な眼で続ける。

【VR内のアバターは肉体があるようでない、言わば精神そのもの。だから催眠術が効きやすいらしくて……】

「催眠ねえ……」

【こんな風に、デュエルのカードを見せただけで、相手を催眠状態に陥らせるそうです】

言って、通常魔法《催眠術》に酷似したカードを見せてくる。ゴーストガールが催眠ハッカーの被害に遭わないよう心配してのことだ
ろうが……真面目な表情に、つい笑ってしまいそうになる。

【たったそれだけで相手の意のままにするそうなので、どうかご注意を】

「心配いらないわ。私にはそんな……催眠術だなんて、効くはずがないもの」

そう言って少年の気遣いを一笑に付す。

「こんな仕事をしてるんですもの。あらゆるウイルスやバグには耐性を施してあるわ。もちろん、催眠術も無効
でしょうね」

ゴーストガールとして活動する際、様々なデータに晒されるのは想定内。催眠術に関しては詳細は不明だが、自己流で作り上げたプロトタイプは一流企業のそれを上回る性能を持つ。

よって、万が一にだが、そんな能力を持つ者が存在し、催眠術を使用されたとしても、ゴーストガールには効かないのだ。

【なるほど、催眠は絶対に効かないと】

「ええ」

【何を命令されても、思い通りにはならないと】

「もちろんよ」

【じゃあ……当然、取引の時に胸を触られても平気ですよネ】

その時、少年がおもむろに手を伸ばし、ゴーストガールの胸……大きく実り、大人の手に余る胸乳に触れた。

「ええ。何も問題ないわ」

だが、ゴーストガールは全く動じない。なにせ、催眠術など彼女には効かないのだから。

【立派な胸ですね。スーツがはちきれんばかりに張り詰めてるじゃないですか。本当に大丈夫なんですか？】

「ええ、全く……あっ、ちょっと痛いかしら？」

【あ、それは大丈夫です。性感がとてつもなく上がって、触られただけでも性欲がたちまち上昇して快感を得るようになってきますから】

黒紫のスーツを押し上げる豊乳。それを揉みながら少年がしつこく確認してくる。

もちろん、何も問題は発生していない。たとえ催眠術などをかけられても、思うままに操られることなどないだろう。

だが少年が何度も揉む内、軽い痛みを感じる。それに対し、少年が都合のいい言葉を返してくる。

「いや……触るだけで感じるなんて。流石にそんなこと、催眠術を喰らってても」

もみっ♥

「あっ♥」

たとえ都合のいい催眠術が存在し、その術中に嵌ったとしても、女の身体がそう簡単に発情するわけがない。……はずだったが、また少年が一揉みすると一気に性欲のスイッチが入り、痛みが心地よい熱感に変換される。

【ほら、気持ち良くなってるじゃないですか。……まさか気持ち良くないですか？ なら、もう催眠にかかっている可能性が……】

「いえ、大丈夫よ。そうだったわ……私、何を勘違いしてたのかしら。んっ♥ こんなに触られて、感じないはずないものね……あんっ♥」

(……そうよね。こんなに感じてるのに、催眠にかかっているなんて有り得ないわ……)

少年に言われ、快感を得て思い直す。女は……少なくとも今の自分は、少年に触られただけで性的快楽を得てしまう身体だった。

改めて催眠にはかかっていないと確認する。だが少年はまだ不安が拭えないらしく、胸を揉みながら対策を提案してくる。

【ちなみに、プロテクト等以外に何か対策はされてますか？】

「んっ♡ いえ、特に何もしてないわ……っ♡」

【それは心配ですね。情報を見る限り、何かした方がよさそうですよ。ちなみに最近 有効だと言われているのが、ホットドッグを咥えることだとか】

そう言い少年がチャックを開けると、中から大きな塊が出てきた。もちろんそこにあるのは男性器……しかも勃起した見事な肉根だ。

「な、何の真似よ！ 早くそれをしまいなさい！」

【いやいや何言ってるんですか、ホットドッグですよ。もしかして、催眠にかかって視力でもおかしくなっているのでは……】

「え？ ……………」

ゴーストガールが見たものは、恥知らずに露出された勃起ペニスだったはず。しかし自信満々にホットドッグと言い張られ、改めて見直すと……

見た目、匂いは完全に男性器であるものの、それは確かにホットドッグのようだ。

「……………ええ、ごめんなさい。いきなりだったから驚いてしまっただけよ」

【そうですか。何の抵抗もなく胸を揉まれて感じているから催眠にかかっているのかと思いましたが】

「何を言ってるのよ。取引相手にセクハラされるなんて当然だし、触られて感じてしまうのは、催眠状態なら当たり前でしょ？ ……………？」

くりっ♡

「あっ♡ ち、乳首は、もっと感じちゃうわ……あぁっ♡」

催眠にかかっていないのだからセクハラを受け入れるのは当たり前であり、セクハラされて性感を得るのも催眠状態であれば当たり前。

そのことに疑問を抱きかけるが、胸と乳首への刺激による快楽で文字通り疑問が揉み消される。

【巨乳は感じにくいとか言いますが……ゴーストガールさんともなれば、こんな見事な巨乳でも感度が高いんですね】

「ええ。感じるのは当たり前だし……んっ♡ あと、普段からオナニーで感度を開発してるわ……あ♡ そこ……っ♡」

【そうですか。でも念の為、催眠対策にホットドッグ咥えときましようか。さっきから見ただけで欲情してるみたいですし】

「あら、お見通しのね♡ こんなことをしなくても、催眠対策は万全だけど……せっかくだし、頂いちゃいましょうか♡」

凶星を突かれ、むしろ小悪魔的な笑みを浮かべてしまう。催眠対策にぬかりはないが、ここはお言葉に甘えて勃起ペニスにしか見えないホットドッグを頂くとする。

【あ、しゃがみ方は下品な蟹股、というか蹲踞をお願いします】

「言われなくても、催眠にかからないために下品になるのは女の嗜み、基本じゃない♥ ほら、これでいい？」

大きく太股を左右に開いて屈む。すると自然に股間の形を強調するような体勢となる。身体にフィットしたスーツを着用しているため、なおさら淫靡さを醸し出すが、これも催眠にかかっていないなら何ら不自然の無いポーズだ。

股間強調姿勢をとりながら、ゴーストガールはホットドッグを咥えるためにマスクを外す。一応程度に正体を隠すためのマスクを何の抵抗も無く除去すると、整った高い鼻梁、妖しく光る唇が少年の眼に晒される。

【マスクの下もやっぱり美人ですね。……あ、噛んじゃダメですよ、あくまで咥えて唇と舌で愛でるだけで……】
「わかってるわよ……じゃ、ホットドッグ一つ、いただきまーす♥」

上気した貌で少年を一つ見上げた後、唇を大きく開けて咥え込む。

「んふうっ……」

【どうです、美味しいですか？】

「うっ……ちょっと、これは……匂いも味も酷いわね……！」

【そんなことはありませんよ、催眠にかかっていないならどちらも美味しく感じるはずです】

（そうは言うけど、このホットドッグ、不味すぎるわ……………あら？）

「んぢゅるるるうっ♥」

咥えた途端、味覚と嗅覚を刺激する酷い味と悪臭。なぜこんなものが気になっていたのか不思議に思えるほど、その味と匂いは出来の悪いものだった。

だが少年に言われ、もう一度だけ舐めてみる。すると一転して美味しく感じられ、官能的にさえ思える生臭さのあまり我を忘れて吸い付いてしまう。

【うわ……催眠対策とはいえ、はしたない顔ですねえ。口の周りが伸びて、ひょっとこみたいになってますよ？】

「だって……んぶぢゅるっ♥ このホットドッグ♥ 最初は不味いと思ったけど……んふうっ♥ よく味わったら、とても美味しいんだもの♥」

口吻が伸び、美貌がはしたなく歪むのも言い訳にってしまうほど、このホットドッグは高質な味だ。

官能的に感じるあまり性感まで得られ、催眠対策など忘れてフェラチオするかのように音を立ててしゃぶりつく。

「んっ♥ んっふ♥ んぶむむむっ♥」

ぢゅっぽ！ ぢゅっぽ！ じゅぽおっ！

「あはっ♥ いいわあコレ♥ 美味し過ぎて、セクハラみたいに気持ち良くなっちゃう♥」

【暗示をかけていないのにフェラでも快感を得ているんですね】

「むふん？ 何は言っはかひら？」

【いえ、何でも】

フェラチオじみた行為による音で少年の声も聞こえず、更に力を強めて吸い立てる。

「ぢゅるっ♥ ぢゅぶるるるるっ♥」

【まあこれホットドッグなんかじゃなくてチンポなんですけどね】

「ふぶっ?!」

(チンポ?!♥ あれっ? 私、何を咥えているのっ?)

少年が呟いた途端、咥えていたはずのホットドッグが最初に見た通りの男性器に戻り、一瞬思考と身体が固まる。

何故、勃起ペニスを美味しくしゃぶっているのか。また疑問が浮かぶが……

【でもゴーストガールさんはチンポ大好きですもんね】

「んふんんっ♥ よくわかってるじゃらいつ♥」

(そうだったわ♥ 私、こういう若くてギンギンのおちんぽが大好きだったのよね♥)

言われ、また疑問が消えてフェラチオを続ける。

催眠対策にホットドッグを咥えていたはずが、自分の快楽のために肉根をしゃぶっている。

しかしそれは催眠にかかっていない何よりの証拠。噂のハッカーなど忘れ、また勃起の味を堪能する。

「んっぶ♥ んぶっふうっ♥ んぞじゅるるううっ♥♥」

【いいですよ、最高の口マンコです……そろそろ出ます、もちろん全部飲み干しますよね!】

「んぶっ♥♥ んぶうんっ♥♥」

激しいフェラチオのあまり、少年が射精感を込み上げさせる。当然、少年の要求には絶対服従。返事ができない唇の代わりにピースサインを出して了承を示し……

ドピュッ♥♥ ビュルルルルッ♥♥

「んぶっふうううううん♥♥♥」

(あはあっ♥♥ 若いおちんぽの精液最高おおっ♥♥♥)

強い脈動と共に放たれる精液。電脳空間ゆえに精力が強いのか、なかなかの量と勢いだが……ゴーストガールは言われた通り、その全てを飲み干した。

精液の味はやはり甘美なものであり、喉奥に発射されるとその刺激だけで達してしまう。更に濃厚な味と匂いも合わさり、ゴーストガールは精飲で深い絶頂に昇ってしまった。

「はあっ♥♥ あはあ……♥♥ よかったわ、なかなかのおちんぽじゃない♥♥」

【そちらこそ、催眠に一切気付かず無様なフェライキとは流石ですね】

「だから、催眠になんてかかってないって何度言わせるの……無様なフェラアクメくらい朝飯前よ」

【ですよ、ミステリアスな雰囲気全開にして魅惑の謎の美女を名乗っておきながら催眠にかかるなんて滑稽すぎますもんね】

遠回しに小バカにしているかのような言葉を使われるが、そこは冷静に受け流す。

「で、もう終わりなの？」

【いえいえ、まだこれからですよ。こんなに疼いたオマンコを放置するのは失礼でしょう？】

ぐちゅっ♡

「あっ♡ いきなり女の股間を触るなんて……♡」

突然に股間……密着スーツな上にアクメでぷっくりと形が浮き出た陰唇を触れられ、生地越しとはいえ抵抗感を抱く。

しかし少年は遠慮なく近付き、ゴーストガールの横にくっついて更に股間を指で揉んでくる。フェラ絶頂で達しているために陰唇はすっかり濡れており、軽く撫でられると粘音がデータ空間に響いていく。

【ただのオマンコマッサージですよ。催眠にかかってないなら受け入れるはずですが、ゴーストガールさん、まさか……】

「もう……ボク、しつこい男は嫌われるのよ？ でも、そこまで言われたらしょうがないわねえ……♪」

いつも男を翻弄する妖艶な笑みを浮かべると、ゴーストガールは下品な蟹股のまま股間をせり出し、少年が触りやすいように体勢を整える。

「疼いちゃってるなら、確かに弄ってもらわないとね♪ フェライキして濡れ濡れのオマンコ、どうマッサージするのか見せてもらうわ♡」

【では遠慮なく……あ、確認ですが、まさか即イキなんてしませんよね？ 催眠にかかっているから感じ過ぎてすぐイッても仕方ないとは思いますが】

「だからね……？ 催眠になんてかかってないんだから、催眠おまんこを弄られても」

ぐちゅっ♡

「おっ♡♡ いきなりっ♡♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうっ♡♡

「んおっ♡♡♡ 催眠っ♡♡ 有り得ないのになっ♡♡ おほっ即イキするううううっ♡♡♡」

不意を突くような高速愛撫。指をスーツ越しに陰唇の中に潜らせての激しい震動に、意味不明な前言も忘れて数秒と保たず二度目の絶頂に達する。

「はっ♡♡ はひっ♡♡ そんな♡♡ こんなこと……っ♡♡」

【ただの発情オマンコマッサージなのに、本当に即イキするなんて……正直に言って下さい、本当に正常な状態なんですか？】

「そ、そうよ♡ 見たらわかるでしょ♡ 催眠のせいで手マンに即イキしてるだけで♡

ただの正常おまんこよお……♡♡」

【あ、蟹股崩さないで】

辟易しながら催眠状態を否定し続ける。言う途中でアクメ快楽に膝が崩れそうになるが、少年がカードを見せて注文すると、まるで催眠にかかったように蟹股のまま姿勢が固定される。

【ちなみに催眠にかかっていると淫語とか言わされたりするんですか？ 例えば愛撫されるとどこがどう気持ち良いか状況説明するとか、イク度に『イク』と言っちゃうとか】

「そこまでしたら、ただのギャグじゃない♥ イクたびに淫語だなんて♥」

ぐちゅっ♥

「えひっ♥♥ おまんこっ♥♥ 蟹股おまんこっまた揉まれたらっ♥♥」

ぐちゅ♥ ぶちゅっ♥ ぐちゅううっ♥♥

「イクッ♥♥♥ おまんこ揉まれただけでイクッ♥♥♥ 催眠おまんこ敏感すぎてっ♥♥♥

催眠かかってないのにイククうううううっ♥♥♥」

また牝肉愛撫を再開されると、やはり感度のあまり即座に絶頂。すると否定したはずの淫語が溢れ、絶頂のたびにスラスラとついて出てくる。

しかし淫語も言葉の矛盾も、暴力的な快感に呑み込まれていく。蟹股で少年にされるがままアクメを貪り続けていく。

「イクッ♥♥♥ またイクッ♥♥♥ 催眠おまんこっ♥♥♥ 手マンでイッちやうのおおおっ♥♥♥」

びちやっ♥ びちやあぁっ♥♥

「はっ……♥♥ あ、イ……♥♥」

愛撫が止まり、余韻でまた果てそうになるが、途中で快樂の波が引いていく。それに合わせてイク宣言も途中で止まり、淫らに崩れた表情も少しだけ素に戻る。

しかし、連続絶頂で昂ぶった性欲は戻らない。前戯だけで何度も達した牝の身体と本能が、更なる責め……性行為、肉棒による陵辱を求めていく。

少年もそれを望んでいるのか、後背位で犯すために背後へ回ると股間越しに肉根を見せ、猛る精力を再びアピールしてきた。

(あぁっ♥♥ おちんぽっ♥♥)

見せられた途端、期待感に瞳を輝かせる。だが、いくら電腦空間内とはいえ、これ以上の行為は憚られる。それこそ、催眠にでもかかっていなければ受け入れることは不可能。

そして催眠にかかっていないことはもう十分に証明できただろう。喉をゴクリと鳴らせ、自らの手でスーツを破って性器を露出させながら、ゴーストガールは少年を拒絶する。

(犯してほしい♥♥ 勃起おちんぽ♥♥ でも……これ以上は、ダメ……♥♥)

「悪いけど……もうここまでよ♥♥ 催眠おまんこ♥♥ ハメられるわけにはいかないものっ♥♥ 勝手に手が動いて無防備になった催眠ドスケベおまんこ♥♥ いくらなんでもただの取引相手のあなたの勃起おちんぽにくれてやるわけには」

【じゃあハメますね】

「おちんぽっ♥♥♥ 早くハメてえっ♥♥♥」

ずっぽおおっ！

「んおおおおおおおお♥♥♥ おちんぽ♥♥♥ イックうううううううううううっ♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！

